

幼稚園における保護者成長支援システムの構築に関する研究 —保護者の成長過程を組み入れた教育課程の編成—

杉本裕子（初等教育学科・講師）

内藤知美（武蔵工業大学）

0. はじめに

1998（平成10年）の幼稚園教育要領では、幼稚園は「地域の幼児教育のセンターとしての役割を果たすように努めること」が明記され、2008（平成20年）3月の幼稚園教育要領改訂においても、家庭との連携を図り、「保護者との情報交換の機会」「保護者と幼児との活動の機会」を設けるなどして、保護者の幼児期の教育に関する理解が深まるように配慮することが記されている。また、地域の幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすために、「幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を提供したり、幼児と保護者との登園を受け入れたり、保護者同士の交流の機会を提供すること」が求められている。同年に改訂された保育所保育指針も、子どもを健やかに育て、保護者への子育て支援を行うという課題が記され、支援のためには、子どもの発達を見通す計画性ととともに保護者の「成長、成熟」の過程を見通した計画的な支援が必要であるとされている。

そこで幼稚園部ではまず子どもが充実した幼稚園生活を送ることができる指導計画の作成を主眼として取り組みを進めてきた。その過程において、指導計画に「保護者との連携」欄が作成されるようになった。それは例えば子ども同士のいざこざ場面を説明する場合、3歳児の子どもが園に慣れると、どこまでの行為が園では認められるのかなど、自己主張しながら試すような時期があること、その場合、子ども同士のトラブルとなり、時に手がでてしまう場合もあることなど、子どもの発達の重要な契機に特有の行為があらわれることを事前に見通しをもって伝えておくことで、保護者の理解が得られ、幼児期の教育を互いに協力して行う姿勢が生まれてくることなどを経験していた。「保護者との連携欄」に保護者の予想される姿を書きながら、どのように保護者に答えていくかという対応を同欄に繰り返し記述する中で、園や子どもの成長に対する保護者の関心や不安には、一定の傾向が見られ、それは子どもの成長とともに変容することが認められた。

子どもと保護者が充実した生活を送るよう計画的な支援を行うには、幼稚園教育要領の理念を踏まえ、両者への視点をもって、個別の環境や教員体制を有するそれぞれの幼稚園の内実に伴う独自の教育課程や指導計画において、それを反映していくことが求められる。幼稚園部では、教育実践の積み重ねを通して、3年間の子どもの成長を見通した園全体の計画に、子どもとともに成長・成熟する保護者の変容過程を位置づけていくことが、幼児期の教育に対する理解を高めると考えた。

1. 研究の目的

本研究は、育児負担を減らす方向のみではなく、「乳幼児期の空洞化」といわれる子どもの危機的状況を前にして、保育力を高めるために保護者の成長支援を行うことが必要であるという立場にたち、実際に保育の場で子どもと共に過ごす時間の多い幼稚園の保護者

に焦点をあて、3年保育における保護者の園生活の実態をとらえるととともに、保護者に対して保育力を高めるための取り組み（アクション）を行いながら、子どもの発達過程と連動した保護者の成長支援のあり方について検討し、成長支援システムの構築を研究するものである。

2. 研究の方法

- (1) 保護者理解、幼稚園生活に対する保護者の実態の検証
 - ・ 幼稚園における保護者活動（アクション）の事例検討
子育てトーク実施状況（コアメンバーによる企画会議を含む）
平成18年度（平成19年）2月15日、3月6日
平成19年度 6月21日、6月28日、7月3日、9月20日、9月27日、11月6日、11月7日、11月21日、12月7日、（平成20年）1月21日、1月29日、1月31日、2月15日、3月6日
 - ・ 保護者アンケートの実施
平成18年度（平成19年）1月29日
平成19年度（平成20年）1月29日
平成20年度 12月26日（年少組・年中組）、（平成21年）1月7日（年長組）
- (2) 3年間の子どもの発達を核とした保護者の成長支援の検討
 - ・ 平成18年度～20年度の各学年の年間指導計画・期間指導計画（年間Ⅰ～Ⅷ期の設定）における「保護者との連携」欄の記述の精査・分析

3. 保護者理解、幼稚園生活に対する保護者の実態の検証

- (1) 幼稚園における保護者活動（アクション）の事例検討

① 幼稚園における保護者活動の概要

幼稚園では子どもの発達過程と連動した保護者の成長支援という視点をもって保護者への様々な関わりや保護者活動を試みている。日常の登降園時に行われる保護者との会話の他、保育のねらいや現在の園児たちの様子を伝える懇談会や面談、また保育の実際について体験を通して理解を深める保育参加、行事参加などを年間計画に位置づけている他、園からの情報発信の方法としてたより（週に1回の学年だより、月に一回の園だよりなど）の配布、時機を得たコミュニケーションをとるための連絡帳やアンケートの活用など、近年の経験が蓄積されて、保護者への関わり方や機会は多様かつ自在になっている。

保護者の会については、園によっては長年にわたり磐石な組織基盤を築き上げ、園と絶妙な連携をとって活動している会も少なくない¹⁾。それぞれの園の特色を反映した保護者会の組織の仕方があると考えられるが、幼稚園の保護者会は平成13年度に園の主導により活動を開始して以来、幼稚園という教育現場における、園と保護者とのよりよい協力体制の構築に向けて検討を続けている。活動が次第に定着してきた中、平成20年度は役員が中心となって、園の教育方針を確認しつつ、それに沿う方向での役員会の役割の明確化、サークル活動とボランティア活動の位置づけ・園との連絡系統の整理など、保護者会組織の整備に着手した。平成20年度現在、幼稚園の保護者会は次のように行われている。

各クラスより選出された役員（3学年7クラス、各クラス2名ずつ、計14名）による役

員会（部・次長を含む）が保護者講座の企画・運営、ボランティア活動の窓口・連絡調整、サークル活動の監督を行う。保護者主体の多様な活動の展開の中に保護者理解の手がかりがあると考えられるが、ここでは子育てトークの活動に注目する。

②「子育てトーク」の事例および考察

i) 子育てトーク（平成18年度末～平成19年度）

保護者からの発案でア) 気軽な相談の機会としてイ) 保護者同士励ましの場としてウ) 異年齢間の保護者の交流、学びあいの場として平成18年度末に企画され、平成19年度にかけて企画相談を含め16回集っている。コアメンバーによる企画会議の回とテーマを決めて園の保護者全体に参加を募るオープンな回があった。子育てについて話し合われた内容は次の通り—「愛情は（兄弟に公平に）分けることができるか」「習い事はどの程度必要か」「母親のストレス解消法」「夫の子育て協力度」「子どもの友だちとの関係・トラブル対処の方法」「兄弟（姉妹）の関係」「思春期の子どもとのつきあい方」「小学校入学にあたっての親の心構え」。今後話し合ってみみたいテーマとしては「一人っ子の育て方」「男の子の育て方」「子どもの嘘にどう向かい合うか」などが挙がった。

また幼稚園で子どもたちがどのように育ち合うのかを親は見ることができないため、イメージできるように子どもの幼稚園三年間の成長をとらえたビデオの上映会を3回に分けて行った。ビデオを見た後、話し合いをしたのだが、ビデオを見ただけで帰ってしまう保護者も多く、話し合いに参加する保護者がいつも同じメンバーになってきた。…《A》

専門家を講師に招いての講演会の希望もあったが、普段なかなかゆっくりと話す機会の無い預かり保育担当のベテラン教員や卒園生の保護者に話を聞きたいなどの声もあり、それらの人たちを囲んでのおしゃべり会を行った。

いずれの回も参加者は感想用紙を配られ、玄関に置かれている閲覧用ファイルに提出しておき、他の保護者がどんな内容であったかを読めるように、と考えられていた。しかし、会の中でしゃべったり聴いたりして得たと思うことを言葉に充分に書き表すのは難しく、あるいは提出自体がためられることもあったと考えられるが、感想用紙の提出自体が少なくなりがちであった。その場を共有するのではないとなかなか参加の意義が伝えにくいことがわかる。また参加者は各回平均6～7名で、そのうち1～2名の新しい参加者を迎えることが多かった。…《B》

年間を通じて中心となってこの活動を担った保護者と、次年度の実施に向けて検討を行ったところ、誰でも何でもしゃべれる雰囲気があること（自由さ、受容と肯定、自発性）、“子育てがうまくいかないのは自分だけ”と思ってしまうことのないよう励まし合える（孤独の解消、共感、連帯感）場であること、また具体的な経験談を聞けるよう他学年の保護者との交流（開かれた関係性、視野の広がり）があることが重要であるという意見で一致し、そのために一度に集まる人数は10人程度とし、参加者が同じメンバーに固定しないよう色々な人に声をかける、などを活動の要件とすることで一致した。…《C》

しかしその一方で、保護者会の役員会で伝えられた子育てトークに参加しなかった・できなかった保護者からの意見として、子育てトークで話される内容は極めて個人的な内容になることも多く、安心して聴く事も話すことも難しい（プライバシー保護の問題）と思っていた、という言葉が伝えられた。…《D》

ii) 茶話会（平成20年度4月～）

平成20年度は保護者会組織の見直しを行ったなかで、それまでサークル活動のひとつとして位置づけていた子育てトークの活動を一旦休止とすることとした。参加者がその都度異なることや、担当の保護者の担う仕事内容など、同好会的な集まりであるサークル活動とは大きく性質を異にするものであることから、保護者会組織の改変に際して、今年度は他のサークル活動と同列におくことを留保したものである。また前述の不参加の保護者から出されたプライバシーの保護の問題について、十分な態勢を整えることができていないためでもある。

代わりに園長との茶話会を毎月の誕生会後に、招かれている誕生月の園児の保護者たちとで行うこととした。これは参加者の人数が多くても十数人までであること、3学年が同時に集まれること、園の保護者全員に参加の機会が均等にあることなどから上記ア)～ウ)の目的に適うと考えたからである。

誕生会後の集いということで、園児の出生時を思い出しての話題が盛り上がる 경우가多く、出産という経験がどの母親にも共通して強烈な印象をもたらしているにもかかわらず、この点における母親同士の連帯感を体験する機会は日常生活においては稀であることを認識させられた。また、たとえ自分の経験とは全く異なるものであっても、語られる様々な出産時の様子に母親同士が熱心に耳を傾け合う姿からは、親としての共感の原点を身体性に求め得ることをも確認させられた。一個人の生理現象としての妊娠・出産ではあるが、まさにその生起が女性を他者や社会につなげていく心理社会的経験となるからであると考えられる。…《E》

その一方では、養子縁組や里親というかたちでの親子関係があることにも配慮し、話題が出産に偏らない配慮が必要であった。幼稚園に入ってからの子どもの成長や変化など、保護者同士共通の話題に事欠くことはないが、将来的には園の中で、里親や養子縁組という親子関係についても温かい関心を持ち合って自然に話題にできるような集いがもてることを目指したい。このような形で引き受けている親役割の担い方から全ての親が示唆されることは限りなくある。しかしわが国では実子や血縁への特別な価値感情が文化的に根強くあり、里親や養子縁組の当事者は偏見に苦しめられることの多い現状から、まだオープンに話題にしていくことは難しい。…《F》

iii) 子育てトーク再開

平成20年度12月には年少保護者からの相談を受けた園長の判断で、本年度休止していた子育てトークの会を開いた。相談内容は「うちの子（長男）が園で乱暴をして周りに迷惑をかけてしまうのではないかと？ そうならないために家庭でできることは何か？」というものであった。そこには保護者自身の子育てに対する不安感や、子どもの育ちの見通しがきかない様子が察せられ、園長が個人的に回答するよりも、保護者どうしの共感や経験の分かち合いなどが有益であると考えたため、子育てトークの経験を活用したいと考えたためである。トークのテーマを「男の子の子育て」とし、対象を在園の男子を育てている保護者に限定した。テーマと参加人数を絞ることは話し合いの充実を高めるために必要な条件であることがこれまでの経験で示されている。その後実施した保護者アンケートには子

育てトークの再開を希望する声がいくつか見られたため、平成20年度末にかけてさらに何回か試行することになっている。その結果から次年度の開催については検討したい。

iv) 考察：「子育てトーク」からわかる保護者の実態

上記iii)にも記したように、子育てトークという会に期待をかける人は一定数あっても、実際には《A》のようにビデオを見るだけでトークには参加しないで帰る人も少なからずある。子育ての悩みを何らかの話題として取り上げてほしいけれども、そこで自身の思いや意見を言葉にして人と分かち合いたいとまでは思っていないということかもしれない。《B》はその両極の姿であると考えられよう。自分の感想もまた伝えたい、聞いてほしい、だから開示OKであるとする人と、会に参加したことは有意義であったけれど、改めて人に何を伝えればよいのか。《D》の意見からは子育てをめぐる話題がいか個人的でナイーブなものであってそう簡単に分かち合えるものではないという根強い防衛が働く領域であることがわかる。共に子育てに奮闘するものとしての共感容易に得られそうであるが、そこに手を伸ばすことは自分の脆く傷つきやすい面があらわになってしまうことでもある。実母子の関係に限って言えば、《E》でみられたように出産のような危険にさらされた身体経験に立ち戻ることは、そこから始まった子育てを心理社会的経験としてとらえなおすことになると考えられる。さらに子育てにおいて保護者の人格的成熟があるとすれば、《F》のように実子との関係に限らず結ばれていく親子や家族の関係を偏見無く受け止め、連帯していくことができるであろう。

(2) 3年保育保護者へのアンケートから

①アンケートの概要

平成18年度より、2学期終了時点で年少組保護者に、また平成19年度は同時期に年少および年中保護者に、更に平成20年度は年少から年長まで三学年の保護者にアンケートをとった。質問の内容はシンプルに、今心配なこと、子どもや自分の変化、園に期待する子育て支援についてをいずれも自由記述で回答してもらうものである。平成18年度の年少学年の3年間にわたる変化をとらえようとするものであった。

②考察：アンケートからみる保護者の3年間の変化

アンケートから、保護者は特に第一子の教育に関しては非常に不安が強いことがわかる。年少組の保護者が記す不安の内容はわが子の集団への適応力（教師の指示に従えるか）、仲間作りの力（お友達ができるか）、人間関係の力（喧嘩で相手を攻撃しないか、いじめられないか）に集中している。そのため保護者からの園に対する要請には「目が行き届くこと」、「安全であること」という教師による万全の管理を求め安心したいという欲求が大半を占める。

年中組保護者の関心は子どもの人間関係が上手くいかないもどかしさに集中するといってもよいだろう。わが子へのもどかしさでもあり「嫌なら嫌とはっきり言えるようになってほしい」その一方で「きつい言い方しかできない娘は友達ができるだろうか」

しかし、三年後年長学年に至った段階では、大人による監視や干渉のないところであっても、子どもたちが自発的に自分たちの生活を大事に思って暮らすようになった成長を確認し、子どもの自立を促す大人の役割の取り方が重要であることに気づいていく。

このようなアンケートであるからこそ、懸念や不安がクローズアップして書かれやすいという面は否めないが、総じて人間関係のトラブルに対する忌避感が強い。「そんなことはあってほしくない」「頭が痛くなる」こと、また大人の手を豊富に備えたい欲求などは、特に年少学年のアンケートから色濃くうかがえる。大人の手・目がたっぷりあることを安心と思うのは当然である一方で、そこには実は信頼関係の構築に対する意思の薄さが指摘されるべきではないだろうか。教師が保護者との間に信頼関係を築くことの必要性については周知のことであるが、その信頼関係における信頼とは何を意味するのかについては意外に曖昧なままおかれているのではないだろうか。その一方で不信の関係から生じる教師・学校と保護者のトラブルについては近年大きく報道されることもあり、「モンスターペアレント」という造語の印象は、容易に情緒的な反応を引き起こしながら、学校と保護者の関係に偏った認識を浸透させていることが危惧される。実際、教育の現場で起きている事実の捉え方に保護者と教師では違いがある。当事者である教師と傍観者である保護者という関係、加えて保護者は子どもを人質にとられているという感じ方を根強く持つ。この感じ方が根本にある以上事実を公正に、冷静に捉えることは既に構造的に困難となる。

ところで山岸俊男²⁾は日常的に多義に用いられている信頼の概念を次のように整理している。すなわち、人間関係において安心を生み出すものが信頼であるという意味で、「能力に対する期待」としての信頼と、「意図に対する期待」としての信頼がある。さらに後者の信頼—相手が自分を搾取する意図を持っていないという期待—においても、相手の自己利益の評価に根ざした「安心」と、相手の人格や自分に対して持つ感情についての評価にもとづく「信頼」とに分かれる。しかし「安心」は社会的不確実性が存在しない状況についての認知であり、人々は他者との間で用心深くふるまう必要を感じないだろう。そうであるとすれば「信頼」が意味を持つ状況は同時に対人関係における用心深さが必要とされる状況でもある、と指摘する。

教育の現場は今日の情報化社会の趨勢に、例えば幼稚園の保育室をインターネットを利用して中継映像を流すサービスが保護者には歓迎されるなど、保護者と教師の信頼関係の構築とは別の方向で翻弄されている。上記のサービスはまさに社会的不確実性を排除しようという動きであって、信頼関係を築くことによって不安を越えていこうとするものではないからである。また見えることが不確実性を払拭するという認識に基づいているが、教育の現場は映像として“見る”ことによっては非常に限定的な理解しか得られないという特質をもつものである。このような傾向は幼児教育の現場として何を意味するものであるか。保護者が求めるのは「安心」であり、「信頼」ではないとすれば、教師が提供しようと努めていることとの齟齬はないか。「安心」はどのようにして提供することが可能であるか。「安心」の提供に尽力することで教育の現場の生命性・躍動感・力動性が失われていくということはないか。また「信頼」の関係はどのようにして成立が可能であるのか。

保護者アンケートから見えてくるのは、保護者自身の人間関係力への不安（自信のなさ）であり、そこから他者への不信が生じている様子がうかがえるが、自らの相手に対する洞察力を高めていくことで解決しようとする意思はうかがえない。むしろそのような難しいことは避けて、確実に安心させてほしいという教師や教育現場への要請が浮かんでくる。しかし保護者が望む社会的な不確実性を限りなく排除した場とは、集中治療室のように完全管理下にある場であり、それは果たして幼児教育の場としてふさわしいものであろうか。

4. 子どもの発達を核とした保護者の成長支援の検討

(1) 指導計画の「保護者との連携」欄の記述の検討

幼稚園では教師たちが作成する指導計画に「保護者との連携」を項目として設け、書き込んでいくことを通し、常に保護者の安定の様子や保育に対して得ている理解や共感の度合いを意識して、保護者への関わりにおける自らの責務を理解して関わっていく。幼稚園は保護者が子どもを養育する経験の充実・進化を支える役割を持つものであり、幼稚園の様々な教育活動は教師がそれを通して家庭との役割分担の明確化も含め、直接・間接に保護者の保育力を高めていく機会となることが望まれる。

幼稚園において検討を繰り返し、現在の指導計画（平成20年度年少、年中、年長、年間計画）に見られる記述は以下の通りである。なお、表中のⅠ～Ⅷは年間を子どもの発達で区切った期となっており、学年によって多少の日程の違いはあるが、Ⅰ～Ⅲが1学期、Ⅳ～Ⅵが2学期、Ⅶ～Ⅷが3学期にあたる。

年少3歳児

	予想される保護者の姿	保護者との連携および留意点
Ⅰ	初めての園生活に不安	*細かいことでも繰り返し丁寧に伝える *何でも聞ける <u>雰囲気</u> を作るために進んで話しかける
	着替えの手伝いをしながら他の子どもと比べる。できないことが不安になり厳しく言い聞かせてしまう	*それぞれのペースを大事に、誉めて進めるよう声をかける *着替え時の親子の様子をよく見る。
		*個人面談をする
		*自分の持ち物がわかるようマークをつけるなど家庭の工夫点を伝える
Ⅱ	知り合いの保護者とばかりつながる	
	着替えができない・しないことに怒る	*それぞれのペースを大事に、誉めて進めるよう声をかける
	お弁当について悩む・不安になる	*便りなどで準備物・量・内容について伝える *お弁当時の様子を <u>丁寧</u> に伝えていく
		*春の遠足などでいろいろな親子の <u>交流</u> ができるよう工夫する
		*懇談会で子どもたちの様子や関係の <u>変化</u> などについてその都度話をする
Ⅲ	バス利用の保護者は園に来なくなり、園の様子が見えにくくなる	* <u>積極的に</u> 連絡を取り必要に応じて話す
		*着替えお助け隊を実行。他の子どもにもかかわる機会を。

		* 保育参加ウィーク…意見や感想を聞き丁寧に対応する
		* あゆみのこと、夏休みに取り組んでもらうことについて伝える
IV	園生活に慣れてくる	* ルールが曖昧になってきた時はしっかりと伝える
	着替えの手伝いがなくなり、こどもが見えにくくなる	* 登降園時に丁寧に子どもの様子を伝える
	運動会を不安に思う	* 運動会に向けての様子や当日の予想される子どもの姿を前もって伝える
		* 子ども同士のトラブルがこれから多くなるだろうことについて懇談会で伝える
V	保護者同士の中が深まりトラブルが起きる	* 懇談会で伝える
	園での子どものトラブルをこどもからの話を聞いて鶴呑みにしたり、保護者間で噂にしたり解決しようとしたりする	* 園のことは必ず担任に確認すること、園外で話さないよう伝える * 子どもの様子やトラブルについて丁寧に話す
	みどり祭を楽しみにしている	* みどり祭の見方、過ごし方を伝える
VI	こどもの服装について適当なものがわからず悩む	* 便りや懇談会での対応 * 保健センターの先生と懇話会を持つ
		* クラスごとのお話し会
VII	担任との信頼関係が強まる	* よいことだけでなく悪いことも伝えてくるので丁寧に对应していこう
		* 1対1で担任と話すばかりではなく、他の教師とも雑談などできるよう
	生活発表会を通して子どもの成長を喜ぶ	* 一緒に参加する気持ちを持てるよう簡単な作り物を依頼する
	幼稚園になれ、少しずつ自分を出すと共に保護者同士の中が深まる	* 仲が深まりすぎたり輪に入れない人が出てくるなど気になることがあったらその都度伝える
VIII	進級への期待と不安を感じる	* 生活面での見直しなど家庭の協力もお願いする 懇談会で年中組の成長の見通しを伝える
		* クラス混合のお話し会をして、保護者同士が交流できるようにする

年中4歳児

I	保育者の数が減り不安に思う	* 登降園時に一日の様子を伝える
	子どもの様子が見えにくくなり心配する	* 懇談会や個人面談を行う
	階段の上り下りの際の安全を心配する	* 園生活の不安など必ず担任に相談するよう伝える
		* プリント配布や提出物の受け取りなどでミスがないようにする

II	プレイデーや遠足の子どもの様子に不安になる	* 普段の様子を丁寧伝える * 個人面談など必要に応じて行き、その子の課題を共有する場面をもつ
	親同士の関係で戸惑いを見せる	
	子どものトラブルを不安に思う	* トラブルについては状況や子どもの思い、保育者の対応などを丁寧伝える またトラブルが育ちの上で大切であることを伝える
	子どもの口調の強さに心配する人が増える	* 教師の対応を伝える
		* おたよりに子どもの遊びや様子、生活面のことについても伝えていく
III	園での出来事を保護者同士で話して不安になる	* 保育参加ウィークや送迎時を利用して子どもの様子を伝え、育ちを共有していく。 * 懇談会でクラスの様子を伝える場面を持つ
IV	子ども同士のトラブルを不安に思う	* トラブルについては状況や子どもの思い、教師の対応を丁寧伝える。 * 今後の育ちの見通しも合わせて伝える
	親同士の輪が固定されてくる	
	口調の強さに心配する人が増える	* 教師の子どもへの対応を伝える
V	怪我が多くなることを不安に思う	
		* みどり祭で作品を通じて子どもの育ちを共有する
VI		* 必要に応じて保護者と話をする場を設ける
VII	進級・受験に向けて心配になる	
VIII		* 生活発表会と合わせて4歳の育ちについて伝える * 保育参加ウィークや個人面談を通して個々の成長を共有しあう場面を持つ * 進級に向けて必要に応じて話す機会を持つ

年長5歳児

I ～ III	新しい環境・教師に不安になる人が見られる	* 教師が保護者を知り、一人ひとりの幼児の育ちや変化などを具体的に話し、保護者との関係を築いていく
	園バス登園などで教師とのコミュニケーションがとれず、園での様子が見えず不安になる	* 様々な方法で園での様子を伝える機会を持つ
IV ～ VI	就学に対して不安になる	* 個人面談などを利用し子どもの育ちや頑張っている様子、これからの課題などを伝える * 共通の悩みなどについて保護者同士が話し合う機会も持てるようにする
	行事などを通して子どもの育ちへの不安が募る	

VII ～ VIII	就学への不安を持ち、教師に相談してくる姿が見られる	* 保育参加では保護者と教師が子どもの成長を共に喜び合う場となるようにする * 小学校との交流内容を伝え、子どもと共に保護者も小学校生活に期待を持てるようにする
------------------	---------------------------	---

(下線は筆者)

(2) 考察：3年間の子どもの発達を核とした保護者の成長支援

三学年共通して、保護者の不安に丁寧に対応しようとする教師の意図が明らかである。教師側の丁寧にといいはやはがてそこから信頼関係へとつながることを意識していると考えられる。

3歳年少組では持ち物についての工夫や注意点、行事への参加の仕方や見てほしい観点など、園生活の基本について繰り返し説明しながら園でのこどもの様子を具体的に伝える努力を重ねている。4歳年中組では、この段階の園児の成長途上に生じる、人間関係のトラブルなど様々な混乱に不安になる保護者が多いことから、発達とはどのようにして起こるものであるか、今の子どもたちの様子が次にどの様な成長につながっていくかを説明し、不安に答えるなどの支援に集中している。5歳年長組になると、保護者への支援の記述が少なくなるが、これは保護者の不安感が急速に減じることの一因であろう。園児は年長組に進級するだけでも大きな変化を見せることが多く、人間関係や生活の仕方のうえでの困難は減少し、むしろ日々の活動に夢中になってとり組んでいく様子が見られるようになる。ようやく、園における子どもの成長を納得して受け入れることができるようになり、保護者は園児の様子を距離を置いて見ることができるようになる。教師との信頼関係が安定してくる時期であると言えよう。教師の支援は他の学年も視野に入れつつ保護者同士がつながりあい支えあう場、また子どもの成長をとともに喜びあう場を作ることなどが中心となってくる。

一方、最初は教師も保護者を信頼することが難しい状況にあることが行間に読み取れる。「保育者が相手を信頼し、協働する自主性を期待し、ゆるやかに受容しつつ協働の場を作っていく力」³が園における保護者の育ちの鍵となっているとすれば、教師が保護者の成長をも見通しつつ、保護者からの不信を受けとめながらも、教師の方から先んじて保護者を信頼する力を回復することができるかということも課題である。

5. おわりに

幼稚園における保護者活動（アクション）、アンケート、年間指導計画から、保護者理解、保護者の園生活の実態、子どもの発達を核とした保護者の3年間の変化について構造化した。これらを踏まえて、保護者成長支援システムの構築に関する試案を提示したい。

幼稚園の保護者については、子どもに対する関心が高く熱心であり、そのため子育てに関する緊張感が強い傾向にあるといえる。本田由紀⁴は、そのような場合、自分の子どもへの関心を高めるように促すことよりも、子育てに対する緊張状態をゆるめる方向での支援が必要であると言う。①さまざまな育児を見る経験の不足②育児に対する見方の偏り③見方を変える信頼できる他者の存在がないことなどが、緊張の原因・要因であると指摘している。

幼稚園では保護者の保育力を高める保護者成長システムの構築に関して次の3つの視点が確認できた。

(1) 「子育て」を見合う場：日常的な体験学習

保護者にとって幼稚園は、子どもが集団生活を開始する場所であるだけでなく、子育てについて、親同士が互いの子育てを見合う場となっている。近年の少子化や地域の崩壊は子育てという体験的営みを、日常的に見る機会を喪失させているが、例えば登降園時の親子の姿は、子育てを見合う貴重な場であり、バス通園を希望する保護者にもあえて強制型ではない「ボランティア型」の保護者の参加活動を企画し、子育てに出会う場を保障することで、子育てをみる経験が少ない保護者にとっては幼児教育への理解を深めるものとなる。

(2) 子育ての異年齢交流：「差」を生かした子育てに対する緊張緩和

幼稚園では保護者アンケートに見られるように、子どもに求めるものは、「集団への適応」がまず第一にあり、また子どもの行為では「みんなといっしょであること」を求める傾向にある。また自分自身の子育てについても、「みんなといっしょ」の子育てを行い、逸脱しないようにという思いが強く、例えばしかるなどの感情を出すことのためらいが強く、そのような感情を押し殺して、心に鬱積させてしまう傾向があることがわかる。

この緊張を開放し、多面的な視野を獲得するために、保護者の子育てに関する交流は極めて有効である。3歳児、4歳児、5歳児と、それぞれの年齢に特有の不安や心配もある。また保護者は、第一子を育てている人もいれば、すでに就学後の子どもをもつ親もいる。そのため、互いに話をすることによって、共通の不安や心配事また子どもの発達に特有の姿を確認したり、子育て経験の差が、短期的な視点から長期的な視点の獲得を促し、異なる保護者自身の子育て観に触れることで、緊張をほぐすことが可能となる。

鯨岡(2002)⁵では、親になる発達過程が、子どもから大人へという個人の経年変化としてではなく、関係の変化という観点からとらえられている。すなわち、親になることを「育てられる者」から「育てる者」への転換と考え、「育てる者」としての生き方や心理・社会的な構えを身につけることが親としての発達であるとする。子育ての異年齢交流は、「育てる者」としての在り方を多面的、多層的な内的経験として活性化する機会となっている。

(3) 「安心」から「信頼」へ：子ども、保護者、教師の協働の場として

幼稚園での子どもの生活は、子どもの成長を支える、教師と保護者の姿を抜きには成立しない。先にも述べたが、保護者が幼稚園に「安心」を求めるのみでは、支援は要求に終始し、保護者が当事者として幼稚園に関わり、その中で自身が変容しつつ育つという視点は生まれにくい。「安心」から「信頼」へと変わるポイントは、まさしく保護者と教師との出会いに終始する。そのためには、教師も自ら育つものであるという姿を提示し、開いていくことである。

本稿は「保護者成長支援システムの構築」という形で、幼稚園が保護者の成長・成熟を支援するシステムの構築を意図する課題となっているが、このシステムに加えるべきもの

は、ともに育つものとしての教師の成長過程である。計画性と実効性をもって、子ども、保護者、教師が協働して成長の場を形成することが、幼児教育への提言となっていくであろう。

引用文献：

- 1 こども未来財団 平成19年度児童関連サービス調査研究等事業報告書 親参加型子育て支援活動の実態調査と担当者の専門性に関する研究 大戸美也子 平成20年2月
- 2 山岸俊男 「信頼の構造—心と社会の進化ゲーム—」 東京大学出版会1998
- 3 1に同じ p91
- 4 本田由紀「家庭教育の隘路—子育てに脅迫される母親たち—」(勁草書房 2008)
- 5 鯨岡峻「「育てられる者」から「育てる者」へ—関係発達の視点から—」(日本放送出版協会 2002)

参考文献：

- 大日向雅美「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない(岩波書店 2005)
- 無藤隆、安藤智子編「子育て支援の心理学—家庭・園・地域で育てる—」(有斐閣 2008)
- 東京学芸大学付属幼稚園「育ちあい、学びあう生活のなかで」岩波書店